令和5年産　（令和5年4月作成）

大豆栽培ごよみ

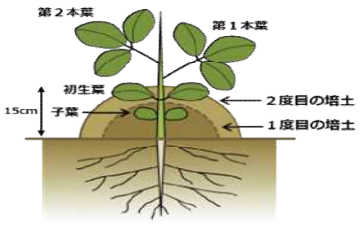
ＪＡたがわ
田川普及指導センター

月・旬	6		7			8			9			10			11		
	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
生育	播種期						開花期		幼莢期		子実肥大期				成熟期		

主な作業

大豆播種適期

・・・・種子消毒
茎葉処理除草剤散布
弾丸暗渠、土壌酸性矯正額縁排水



梅雨明け後は暗きょ栓を閉める

・（本葉２～３枚）第１回中耕培土
・（本葉５～６枚）第２回中耕培土

白変葉

過乾燥時の畝間かん水

・病害虫防除（カスケード乳剤）※（ハスモンヨトウ・カメムシ類幼虫）
・病害虫防除例（プレバソンフロアブル５＋スタークルメイト液剤１０）（ハスモンヨトウ・カメムシ類）
・病害虫防除例（エクシードフロアブル＋トップジンＭ水和剤）（カメムシ類・紫斑病）
・病害虫防除例（スタークルメイト液剤１０）（カメムシ類）

ハスモンヨトウ老齢幼虫

ミナミアオカメムシ幼虫

・・乾燥、調製
・刈取り

1. 播種前準備

- ほ場の集団化と排水不良田は弾丸暗渠＋額縁排水を行う。
- 土壌酸性矯正にケイカルまたは苦土石灰（100kg/10a）を施用。
- 耕起は播種当日に行うか、１工程播種とする。
- 種子は毎年更新する。

2. 播種　★福岡県の銘柄品種はちくしB5号

①紫斑病予防・出芽苗立ちの安定に効果がある「クルーザーMAXX」を種子1kgに対し8ml使用する。または、「キヒゲンR－2フロアブル」を種子1kgに対し20ml使用する。
②団地内では同時に播種を行う。

3. 施肥基準

肥料名＼播種期	7月20日以前	7月21日以降
塩化加里（粒）	15	15
PK化成40	40	40
くみあい化成ベスト444	0	15

※2年目以降の連作田では、元肥にくみあい化成ベスト444を15kg/10a施用する。

4. 播種時期と栽培密度

①降雨後でも速やかに播種できるよう、播種前耕起は播種当日に行うまたは部分浅耕播種等の１工程播種とする。
②播種適期は6月15日～7月20日、なるべく7月15日までに播き終える。
③播種が遅くなるほど密播きにする。

播種期		6/15～30	7/1～10	7/11～20	7/21～31（遅播き）
目標苗立本数（本/㎡）		7.0～9.5	9.5～14	14～19	19～26
播種量（kg/10a）		2.7～3.6	3.6～5.3	5.3～7.1	7.1～9.8
株間設定（cm）	条間60cm	40～30	30～20	20～15	15～11
	条間70cm	34～26	26～17	17～13	13～9
	条間80cm	30～22	22～15	15～11	11～8

※播種量は、百粒重を32g、出芽、苗立と率85%として算出。
※株間設定は、目皿式播種機・2粒播きでの値、3粒播きでは株間を1．5倍に広げる。

株間計算早見表

見方:①播種機の条間を確認、②粒数を確認、③時期を確認、④株間の目安が決定

条間　※左列が2粒点播、右列が3粒点播のとき

60cm 2粒	60cm 3粒	65cm 2粒	65cm 3粒	70cm 2粒	70cm 3粒	75cm 2粒	75cm 3粒	80cm 2粒	80cm 3粒	株間（cm）
10aあたりの播種量（kg）										
早まき(6/15～6/30)				適期まき(7/1～7/20)			遅まき(7/21～31)			
10.7	―	9.9	―	9.1	―	8.5	―	8.0	―	10
7.1	10.7	6.6	9.9	6.1	9.1	5.7	8.5	5.3	8.0	15
5.3	8.0	4.9	7.4	4.6	6.9	4.3	6.4	4.0	6.0	20
4.3	6.4	3.9	5.9	3.7	5.5	3.4	5.1	3.2	4.8	25
3.6	5.3	3.3	4.9	―	4.6	―	4.3	―	4.0	30

5. 病害虫防除基準

（令和5年4月28日時点登録情報）

薬剤名	希釈倍率	散布量(/10a)	収穫前日数	使用回数	対象病害虫
プレバソンフロアブル5	4000倍	100～300L	7日前まで	2回以内	ハスモンヨトウ
スタークルメイト液剤10	1000倍	100～300L	7日前まで	2回以内	カメムシ類
エクシードフロアブル	2000倍	100～300L	14日前まで	3回以内	カメムシ類
カスケード乳剤※	4000倍	100～300L	7日前まで	2回以内	カメムシ類 ハスモンヨトウ
トップジンM水和剤	700～1500倍	100～300L	14日前まで	4回以内	紫斑病
アミスター20フロアブル	2000～3000倍	100～300L	7日前まで	2回以内	紫斑病

※ハスモンヨトウは、発生初期の防除を徹底する。ふ化幼虫が群集している白変葉は、早めに手で取り除くか薬剤散布する。
※プレバソンフロアブル5を散布の際は、展着剤を加用する。
※カスケード乳剤：開花期と9月下旬の防除は必須

6. 雑草防除基準

（10a当たり）　（令和5年4月28日時点登録情報）

	薬剤名	処理時期	使用量（ /10a）	希釈水量（ /10a）	使用時期及び注意事項
播種前	ラウンドアップマックスロード	耕起前又は出芽前まで（雑草生育期）	200～500mL	50～100L	
播種前	サンフーロン液剤	播種10日以前又は出芽前まで（雑草生育期）	250～500mL	25～50L	
播種後処理	ラクサー乳剤	播種後出芽前（雑草発生前）	400～800mL	100L	・効果を高めるために、播種前の砕土や整地を丁寧に行う。 ・覆土が浅いと出芽不良等の薬害を生じることがあるので、深さは必ず2～3cmとし、軽く鎮圧する。 ・粒剤は散布ムラに注意する。 ・ラクサー乳剤はクリアターン乳剤より、広葉雑草、特にホソアオゲイトウに対する効果が高い。
播種後処理	ラクサー粒剤		4～8kg	―	
播種後処理	サターンバアロ乳剤	は種後出芽前	600～1000mL	100L	・水稲に隣接するほ場で、ドリフトの懸念がある場合には、サターンバアロ乳剤とフルミオWDGを混用して使用。
播種後処理	フルミオWDG	播種後出芽前（雑草発生前）	5～10g	100L	1年生広葉雑草に効果が高い。（キク科、ホオズキ類には効果が高い）イネ科雑草に効果が無いため、ラクサー乳剤等と混用。薬害が出る可能性があるので購入時に同意書が必要。
生育期処理	ポルトフロアブル	イネ科雑草3～10葉期（収穫30日前まで）	200～300ml	50～100L	・遅効性でありイネ科雑草を完全に枯殺するまで～日を要する。 ・水稲には薬害があるので、周囲に水稲がある場合は薬剤が飛散しないように注意する。
生育期処理	アタックショット乳剤	大豆2葉期～開花期（雑草生育期　但し、収穫45日前まで）	30～50ml	100L	・イネ科雑草には効果が無いので、イネ科雑草が混在する場合は、ポルトフロアブルを混用する（混用すると薬害が出やすくなるが、新葉には影響はなく、次第に目立たなくなる） ・キク科、カヤツリグサ科には効果が劣る場合があるため、それらが優先するほ場での使用はさける。
生育期処理	大豆バサグラン液剤	大豆2葉期～開花前 広葉雑草生育初期～6葉期（収穫45日前まで）	100～150mL	100L	・イネ科雑草には効果が無いので、イネ科雑草が混在する場合は、ポルトフロアブルを混用する（混用すると薬害が出やすくなるが、新葉には影響はなく、次第に目立たなくなる） ・また、広葉雑草でも、エノキグサ、アカザ、シロザ、イヌビエ、ホソアオゲイトウ等には効果が劣るので、これらが優先するほ場では使用をさける。
畝間処理	ザクサ液剤	収穫28日前まで（雑草生育期、は種・定植前又は畝間処理）	300～500mL	100～150L	大豆本葉5葉期以降、雑草生育期に畝間処理する。

※播種後処理剤を散布しないと雑草が多くなり、中耕・培土でも抑えることができないため、必ず散布する。
※除草剤の使用に当たっては、ドリフトに注意し、周辺の作物にかからないように注意する。

7. 過乾燥対策

・開花始め～莢実の伸長肥大期（8月下旬～10月上旬）までが乾燥に最も弱く、収量に大きく影響する。
ほ場が白乾し始めたら、うね間かん水を行う。
・うね間かん水は、気温が高い日中は避け、できるだけ短時間にほ場全体に水が行き渡るようにする。
水が行き渡ったら後は速やかに落水する。

8. 収穫・乾燥

①成熟期は大部分が落葉し莢を振ると「カラカラ」と音がする程度まで乾燥した時期である。
②収穫の目安は葉が完全に落ち、茎がポキポキと折れる頃。
雑草の多い場合は汚損粒の発生原因になるので刈取り前に抜き取る。
朝夕の水分が多い時間帯は避け、日中に収穫する。

紫斑病

虫害粒

★農薬使用前には必ず農薬ラベルで登録内容を確認する。隣接している水稲や野菜などへの飛散に注意する。